第43回
ブカレスト／ルーマニア
Bucharest Romania

チャウセスクの残像

リクルート=スタディサプリ講師　村山 秀太郎

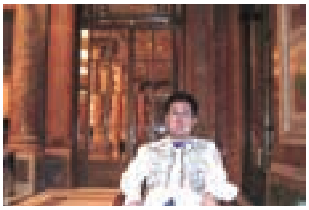
「革命」の革命？

世の中にはよくよく考えると奇妙な言葉遣いがある。「東欧革命」がそのひとつだ。これは、1989年11月の「ベルリンの壁崩壊」の影響で翌12月に東ヨーロッパ各国で共産党の一党独裁体制が雪崩を打ったように終焉（しゅうえん）を迎えたことを指す語である。が、そもそも共産主義体制というものが、マルクスのいう階級闘争、つまり「革命」の結果なのだから、その体制の崩壊は本来「革命」ではなく「反革命」なのだ。ロシア連邦のプーチン大統領は旧ソ連時代のレニングラードのKGBのトップだったが、KGBの起源はロシア革命期に創設されたチェカ(反革命・サボタージュ・投機取り締まり全ロシア非常委員会)なのだ。共産党のソ連を揶揄（やゆ）することは「反革命」的な行為であり、実際、ソ連時代に勤労しないと「反革命罪」で捕まった。ロンドンの大英図書館で学究生活を送ったカール・マルクスの思想は、多分にイギリス古典派経済学の労働価値説の影響を受けていた。「働かざる者食うべからず」というわけだ。ソ連邦の国旗には、鎌とハンマーがあしらわれていた。

もちろん、革命という言葉を本来の、天の命が革（あらた）まり姓が易（か）わるという中国の易姓革命の意味でとらえ、革命を単なるレジームチェンジかグレートリセットと考えれば、言葉遣いに目くじらを立てる必要はないという思う手もある。

その「東欧革命」のうち、無血で穏便に共産党一党体制が終わったのが、そのネーミングどおりのチェコスロバキアの「ビロードの革命」なら、独裁者チャウシェスク夫妻が即銃殺されるというショッキングな結末を迎えたのがルーマニアであった。けだし、ラテンの血は熱かった。古代ローマ帝国がローマ(ラテン)人を入植させた地域ルーマニアは、バルカン半島で唯一ラテン系の国である。

その“銃殺”の当日、私は“壁崩壊”直後のベルリンにいたので、その報道に接したのは日本に帰ってからのことだった。ただ一度、私がルーマニアへ行ったのは、だいぶ後の2005年のことだ。1980年代にチャウシェスクが「国民の館」と銘打って造成した議会の議事堂は、ペンタゴンに次いで世界2位の大きさだとか、いやタイ国会議事堂に次いで世界3位だとか言われた。確かに行ってみて、その柱の太さにエジプト・ルクソールのカルナック神殿を思い出した。事実上のチャウシェスク邸である。


「国民の館」にて(2005年)

1989年の“革命”のきっかけは、西部ティミショアラで、反政府活動家の牧師に対する警察の強制連行を阻止するために教会に集まった市民に対し、政権が武力弾圧を命じたことだった。集会が数万の規模に膨れ上がると、チャウシェ